

第2章 外来語の現状に対する意識

相澤 正夫

1 はじめに

近年著しく増加していると思われる外来語やアルファベット略語(以下、「略語」)の現状について、国民一般がどのような意識を持っているか、「外来語に関する意識調査(平成15年調査)」のデータに基づいて概観的な分析を行う。対象とするデータは、大きく以下の三つの領域にかかわるものである。それぞれについて、性、年齢を中心に、社会的属性による意識のあり方の違いや特徴を明らかにする。

- ① 日常生活で接する外来語に対する意識
- ② 外来語使用の功罪(良い点・悪い点)についての意識
- ③ 外来語・略語に対する自己認識

①では、現代社会における外来語の状況を、国民一般が日常生活の中でどのように実感しているのか、外来語に接触する頻度や外来語の増加に対する評価的な意識を取り上げる。②では、外来語の使用が個人や社会に与える功罪両面の影響力について、国民一般がどのように見ているのかを探索する。③では、自分自身の外来語や略語とのかかわり方を国民一般がどのように認識しているのか、意味が分からずに困った経験なども含めて話題とする。

2 日常生活で接する外来語に対する意識

2.1 外来語への接触頻度についての意識

まず、日常生活で外来語にどれくらい頻繁に接触していると意識しているか、すなわち外来語一般への接触頻度、あるいは認知率について、次のような質問文で調査を行った。結果は、図1のとおりである。

問：日頃、読んだり聞いたりする言葉の中に、外来語を使っている場合が多いと感じることがあります。この中から1つ選んでください。

しばしばある 時々ある あまりない めったにない わからない

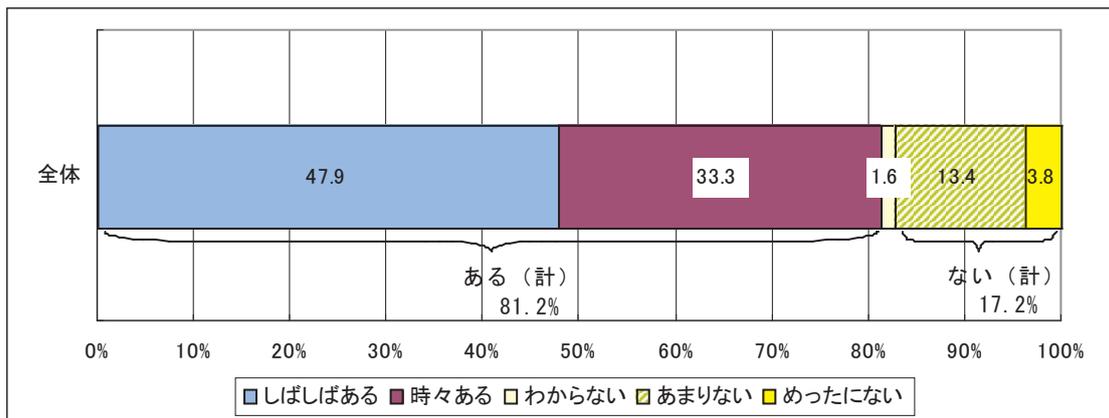


図1 外来語への接触頻度についての意識

「しばしばある」(47.9%)と「時々ある」(33.3%)を合わせた肯定的な回答「ある(計)」が8割を超える(81.2%)。一方、「あまりない」(13.4%)と「めったにない」(3.8%)を合わせた否定的な回答「ない(計)」は2割弱である(17.2%)。およそ5人中の4人が、日頃、読んだり聞いたりする言葉の中に、外来語を使っている場合が多いと感じていることが分かる。世に言う「外来語の氾濫」の一端をうかがうことができる。

性別に見ても、「ある」という回答が、男女とも8割を超えており(男性80.8%, 女性81.6%), ほとんど男女差は認められない。

「ある」という回答について、さらに性・年齢別に詳細に見たのが図2である。図2に示すとおり、男女とも8割のラインを超えているのは、30代、40代、50代のいわゆる社会的活躍層に当たる年齢層であり、ある程度ははっきりした年齢差が認められる。「ある」という回答は、男性の50代(87.3%)と30代(86.4%), 女性の40代(88.2%)で9割近くと特に高くなっている一方、男性の10代(68.2%)では唯一7割を割っている点が注目される。

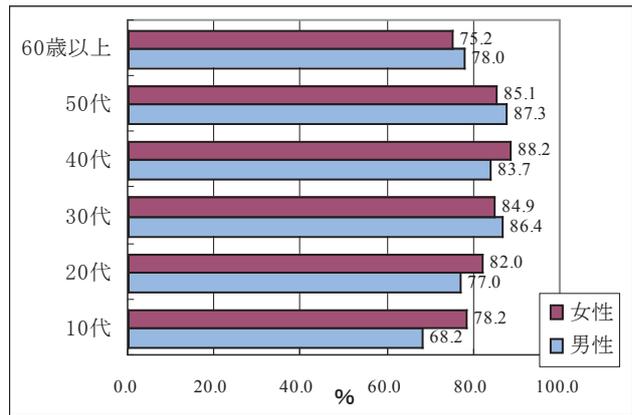


図2 外来語が多いと感じている人の割合 (性・年齢別)

2.2 外来語の増加傾向に対する意識

次に、今後さらに外来語が増加していくとしたらそれをどう思うか、すなわち外来語の増加傾向に対する評価的な意識について、次のような質問文で調査を行った。結果は、図3のとおりである。

問：今以上に外来語が増えることについてどう思いますか。どれがお気持ちに一番近いですか。

好ましい まあ好ましいことだ あまり好ましいことではない 好ましくない わからない

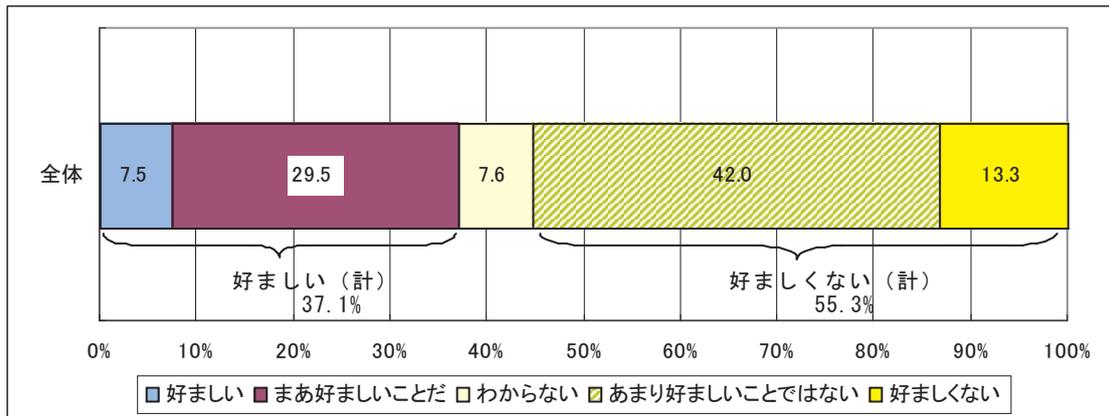


図3 外来語の増加傾向に対する意識

「好ましい」(7.5%)と「まあ好ましいことだ」(29.5%)を合わせた肯定的な回答「好ましい(計)」が4割弱である(37.1%)。一方、「あまり好ましいことではない」(42.0%)と「好ましくない」(13.3%)を合わせた否定的な回答「好ましくない(計)」は5割を超えている(55.3%)。全体の過半数が、外来語が今後さらに増加することを好ましくないと見ている一方で、少なくとも3人中の1人は好ましいと見ていることが分かる。

性別に見ても、「好ましい(計)」が男性36.7%, 女性37.4%, 「好ましくない(計)」が男性56.7%, 女性54.1%と、ほとんど男女差は認められない。

さらに性・年齢別に詳細に見ると、図4-1(男性), 図4-2(女性)のようになる。二つのグラフは酷似しており、年齢別に見ても、男性と女性の様相にほとんど差がない。外来語が今後さらに増加することに対しては、年齢層が上がるにつれて「好ましくない」とする回答が右肩上がりで大増えしていく。10代~30代までは「好ましい」とする回答が「好ましくない」とする回答を上回っているが、40代~60歳以上ではこの関係がきれいに逆転している。外来語の増加傾向に対する評価的な意識は、増加支持派が優勢である若年層と増加反対派が優勢である高年層とに、世代的に大きく二分されていることが分かる。

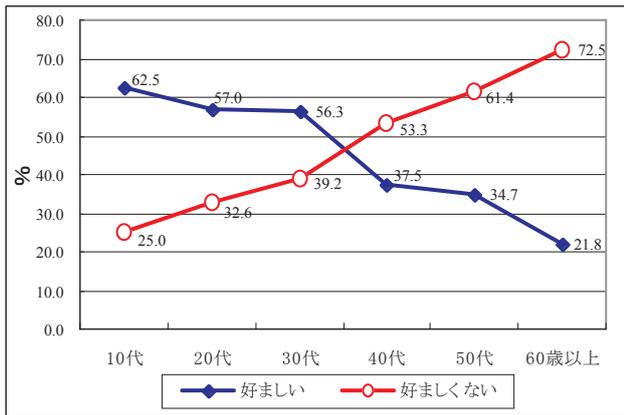


図4-1 外来語の増加傾向に対する意識 (男性・年齢別)

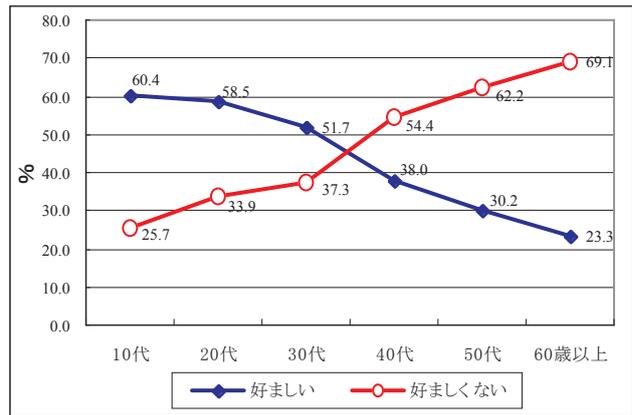


図4-2 外来語の増加傾向に対する意識 (女性・年齢別)

3 外来語使用の功罪(良い点・悪い点)についての意識

3.1 外来語を使うことの良い点

まず、外来語を使うことの良い点、すなわち外来語使用の「功」の部分に対する評価的な意識について、次のような質問文により、複数回答を許容する調査を行った。結果は、図5のとおりである。グラフは回答の多い順に配列してある。

問：あなたが、外来語を使うことの良い点と思うものを、この中からいくつでも選んでください。

- 新しさを感じさせることができる
- しゃれた感じを表すことができる
- 知的な感じを表すことができる
- 同じ意味でこれまで使っていたことばの暗いイメージをなくすことができる
- これまでになかった物事や考え方を表すことができる
- 話を通じやすく便利である
- 露骨な表現を和らげる効果がある
- この中に良いと思う点はない
- わからない

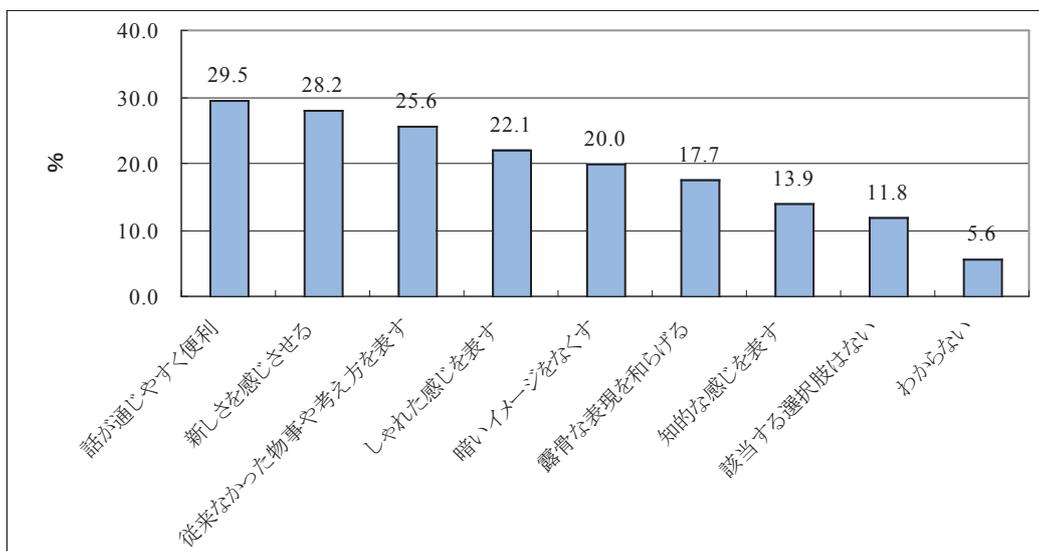


図5 外来語を使うことの良い点

「話を通じやすく便利である」(29.5%)、「新しさを感じさせることができる」(28.2%)、「これまでになかった物事や考え方を表すことができる」(25.6%)、「しゃれた感じを表すことができる」(22.1%)、「同じ意味でこれまで使っていた言葉の暗いイメージをなくすことができる」(20.0%)が、いずれも2割台で上位に来ている。

これらのうち、「話を通じやすく便利である」と「これまでになかった物事や考え方を表すことができる」の二つは、専門語としての外来語(以下、「専門外来語」)の特徴をとらえたものと考えられる。専門語は、外来語に限らず、本来、ある特殊な領域の話題が、その領域の専門家の間でスムーズに展開されるよう編成されている。厳密に定義された用語が、正確かつ効率的に情報のやりとりを行うために、専門家の間を自在に飛び交うようにできているのである。ここでは、このような専門外来語としての観点から、「話を通じやすく便利である」という効率性の側面と、「これまでになかった物事や考え方を表すことができる」という定義の正確性、あるいは表現上の的確性の側面が、外来語を使うことの長所として支持されているととらえることができる。

一方、「新しさを感じさせることができる」「しゃれた感じを表すことができる」「同じ意味でこれまで使っていた言葉の暗いイメージをなくすことができる」などは、主として商業活動の分野における宣伝効果をねらった外来語(以下、「商業外来語」)の特徴をとらえたものと言えよう。商業外来語は、日本語の中で外来語だけがもつ雰囲気やイメージを存分に活用している点に特徴があり、受け手を情緒的・感覚的に刺激することによって効果を上げている。このような商業外来語としての観点から、外来語を効果的に使うことも、外来語を使うことの長所として支持されていると見られる。

なお、「この中に良いと思う点はない」という否定的な回答は、全体の11.8%であった。年齢別に見ると、60歳以上では男性23.5%、女性22.4%といずれも2割以上を占め、高年層で外来語使用に対する否定的な見方が根強いことをうかがわせる。

さらに性・年齢別に詳細に見ると、図6～図9のように、一定の傾向が明らかに観察される。

まず、図6を見よう。「話を通じやすく便利である」という機能面での効率性を支持する割合は、若年層が4割台で最も高く、中年層の3割台を経て高年層の2割台へと直線的に大きく下降していく。ここには、外来語でスムーズにやりとりができる若年層と、うまく使いこなせていない高年層との世代間の対比が垣間見える。男女差はほとんど認められない。

また、図7から、「しゃれた感じを表すことができる」という感覚面での効果を支持する割合も、緩やかではあるが若年層が高く、中・高年層で低くなる傾向が認められる。女性の方が男性よりも若干高めである点も注目される。

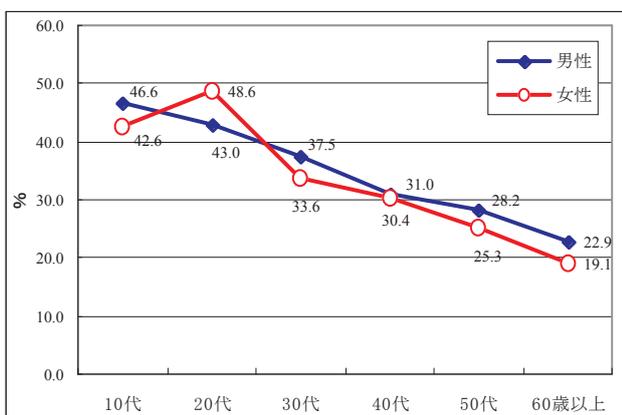


図6 「話を通じやすく便利である」
(性・年齢別)

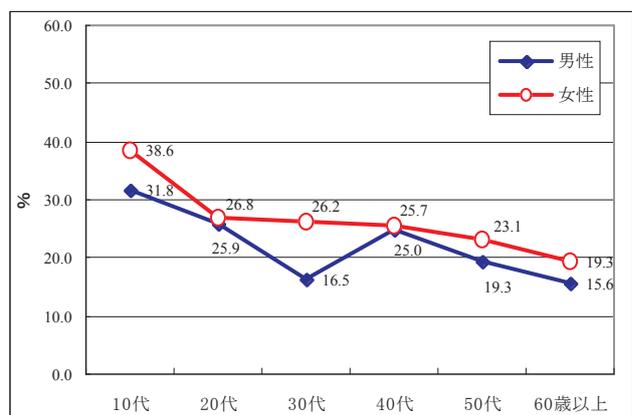


図7 「しゃれた感じを表すことができる」
(性・年齢別)

一方、図8から分かるように、「新しさを感じさせることができる」を支持する割合は、10代が若干高めであり、反対に60歳以上が若干低めではあるものの、あとの年齢層はほぼ横一線の状態である。男女差もほとんど認められない。これも感覚面での効果という側面をとらえているが、図7の「しゃれた感じを表

ることができる」とは少し異なった様相を示している。

興味深いのは、図9の「これまでになかった物事や考え方を表すことができる」のグラフである。両端の10代と60歳以上が低く、その間の20代から50代までが盛り上がった形になっている。男性では30代から50代まで、女性では20代から40代までと、盛り上がりの位置には若干のずれがある。外来語が新しい事物や概念の導入に貢献するという側面については、社会的活躍層に当たる年齢層の関心が高く、その支持を集めていると見ることができるだろう。

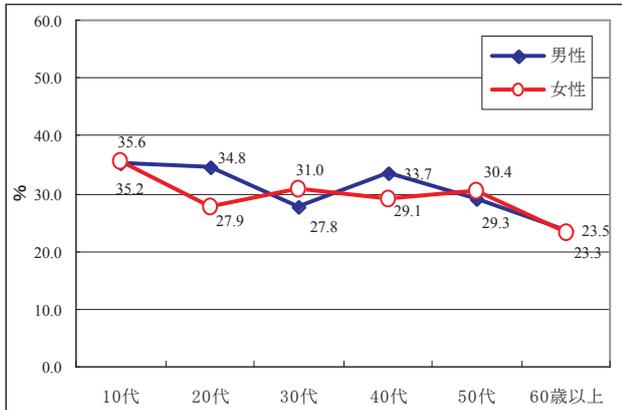


図8 「新しさを感じさせることができる」 (性・年齢別)

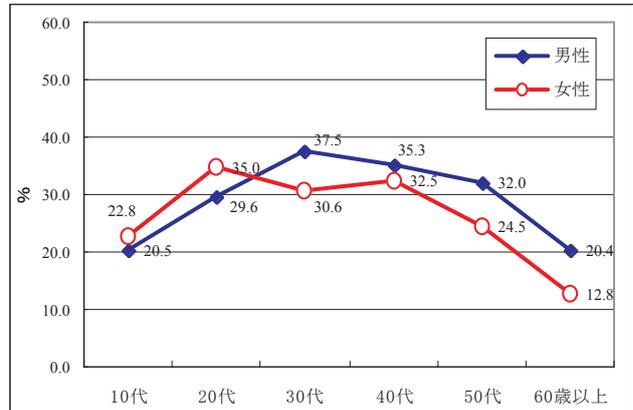


図9 「これまでになかった物事や考え方を表すことができる」 (性・年齢別)

3.2 外来語を使うことの悪い点

次に、外来語を使うことの悪い点、すなわち外来語使用の「罪」の部分に対する評価的な意識について、次のような質問文により、複数回答を許容する調査を行った。結果は、図10のとおりである。グラフは回答の多い順に配列してある。

問：では、あなたが、外来語を使うことの悪い点と思うものを、この中からいくつでも選んでください。

- 日本語の伝統が破壊される
- いかにも気取っている感じをあたえる
- 軽薄な感じをあたえる
- 相手によって話を通じなくなる
- 誤解や意味の取り違えがおこる
- 人を煙に巻いたりごまかしたりするときに使われる
- 読み方がむずかしくて覚えにくい
- 正しい英語を学ぶ妨げになる
- この中に悪い点と思うことはない
- わからない

「相手によって話を通じなくなる」(46.7%)が最も高く、以下「誤解や意味の取り違えがおこる」(37.2%)と「日本語の伝統が破壊される」(33.3%)が3割台、「読み方がむずかしくて覚えにくい」(27.4%)が2割台で上位に来ている。

これらのうち、第1位の「相手によって話を通じなくなる」と第2位の「誤解や意味の取り違えがおこる」の二つは、言葉の伝達機能の面から、コミュニケーション不全を招きがちな外来語の問題点を指摘するものである。外来語は、専門語として専門家の間で使うときは、きわめて便利で伝達効率も高いという長所がある反面、ひとたび専門外の一般の人々に向けて発せられると、かえって意思疎通の妨げになるといった両刃の剣のような性格を持っている。情報の受け手の側の知識状態がどうであるかによって、外来語使用の功と罪がぐるりと入れ替わるのである。外来語使用の問題点の上位に、言葉の伝達機能にかかわる項目が来ていることは、優先的に解決すべき外来語問題が何であるかを強く示唆しているものと思われる。

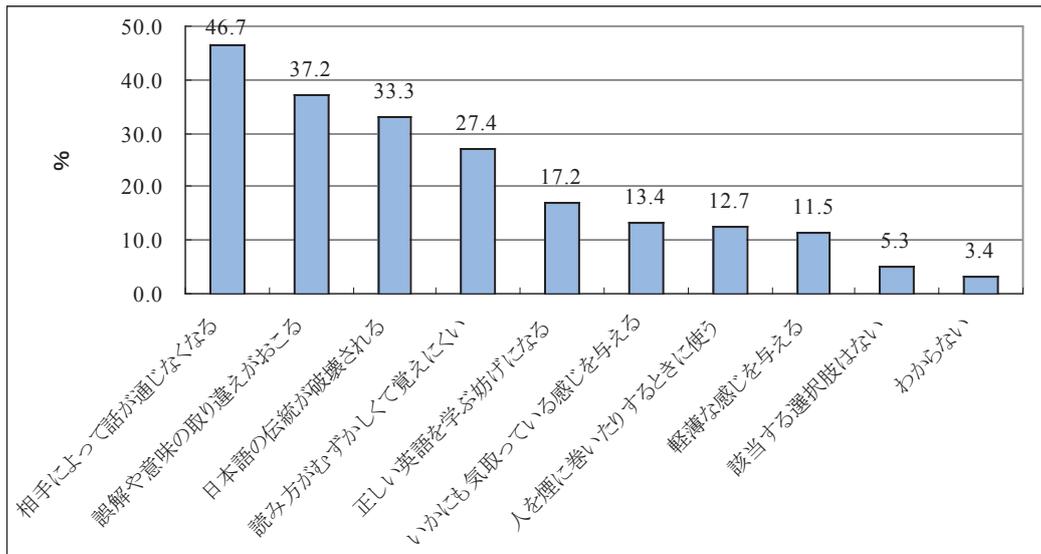


図10 外来語を使うことの悪い点

このように人と人の伝達という言葉の機能面を重くみる〈機能重視〉の立場に対して、第3位の「日本語の伝統が破壊される」には、日本語が長い歴史の中で培ってきた良き言葉と文化的伝統とが二つながら崩されていくといった危機感が含まれている。その意味で、こちらは日本語そのものの伝統を重くみる〈伝統重視〉の立場と言うことができる。3人中の1人が、伝統重視の立場から日本語そのものに対する危機を表明していることになる。

第4位の「読み方がむずかしくて覚えにくい」は、外来語の習得上の困難を指摘するものであるが、こちらはほぼ4人中の1人が表明していることになる。

なお、「この中に悪い点と思うことはない」という回答は、わずか5.3%にとどまる。これは裏を返せば、9割以上の方が外来語使用に何らかの問題を感じているということでもある。

さらに、性・年齢別に詳細に見ると、図11～図14のように、一定の傾向が明らかに観察される。

まず、図11と図12を見よう。いずれも外来語の伝達機能の面にかかわる項目である。基本的にすべての年齢層でコミュニケーション不全の問題が強く意識されているが、両端の10代と60歳以上が若干低めで、その中間の年齢層が盛り上がった形になっている。コミュニケーション不全に対する問題意識は、社会的活躍層に当たる年齢層に顕著に見られ、どちらかと言えば女性に強く見られると言えるだろう。

一方、図13と図14は、いずれもグラフが右肩上がりになっており、特に40代以上の高年齢層に行くほど強く問題として意識されていることが分かる。40代以上の年齢層は、伝統重視の立場から日本語そのものに対して危機を表明する世代であると同時に、外来語の習得に困難を感じてそれを訴える世代でもあると言うことができる。習得上の困難については、女性の割合が高い点も目を引く。

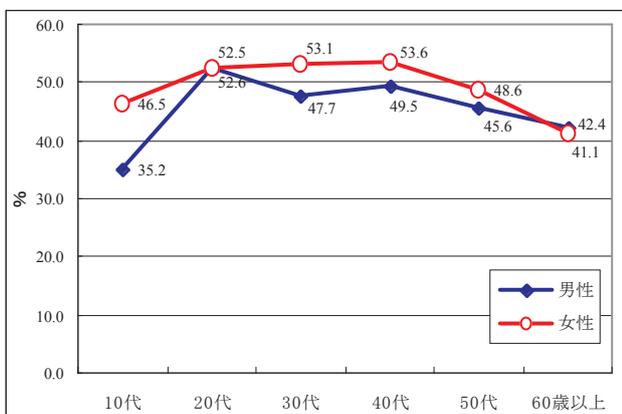


図11 「相手によって話が通じなくなる」
(性・年齢別)

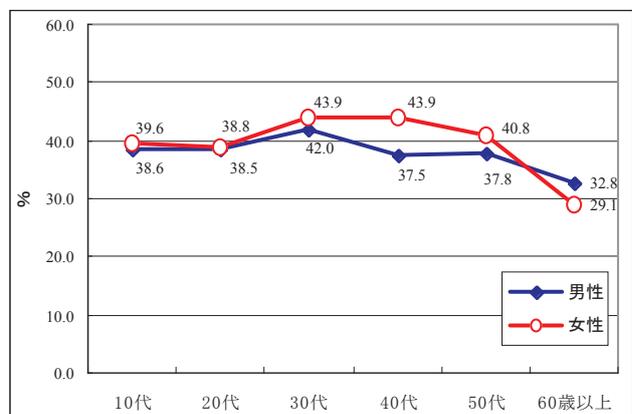


図12 「誤解や意味の取り違えがおこる」
(性・年齢別)

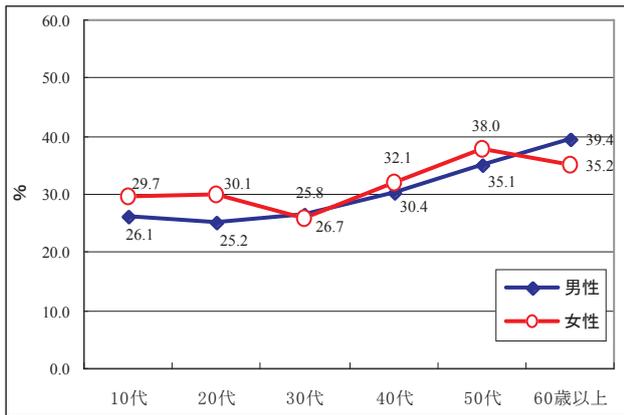


図13 「日本語の伝統が破壊される」
(性・年齢別)

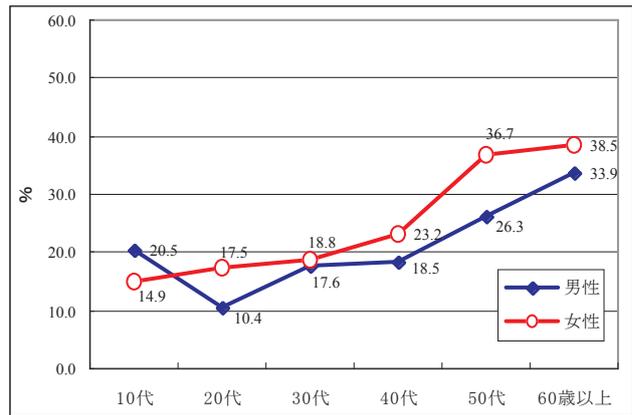


図14 「読み方がむずかしくて覚えにくい」
(性・年齢別)

4 外来語・略語に対する自己認識

4.1 外来語・略語の知識についての自己認識

まず、自分自身が外来語や略語を知っている方だと意識しているか、それとも知らない方だと意識しているか、すなわち外来語・略語の知識についての自己認識について、次のような質問文で調査を行った。結果は、図15のとおりである。なお、ここでの「どちらとも言えない」は、自発的な回答として得られたものである。

問：あなたは、外来語や略語を知っている方だと思いますか、知らない方だと思いますか。

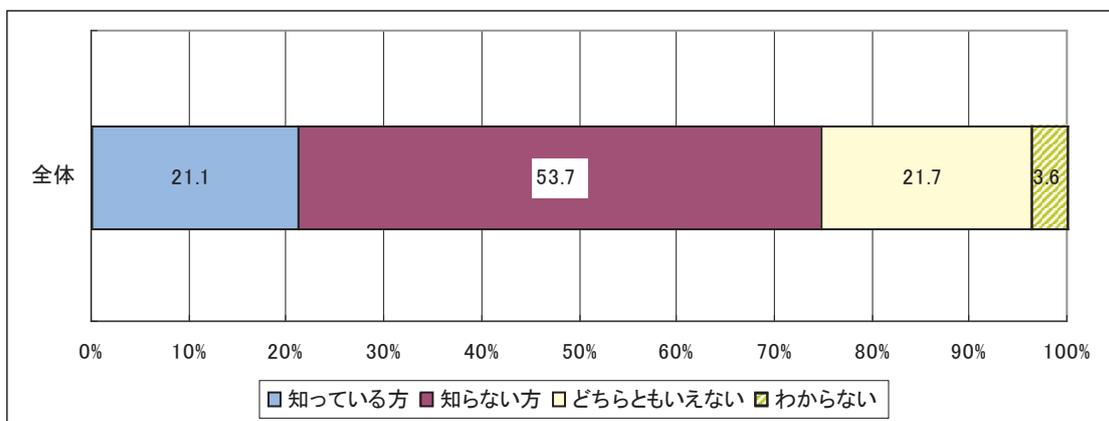


図15 外来語・略語の知識についての自己認識

「知っている方だと思う」という回答は2割を超える程度(21.1%)、一方、「知らない方だと思う」という回答は過半数(53.7%)である。外来語を知っている方だと自認する人は、およそ5人中の1人に過ぎないことが分かる。

性別に見ると、「知っている方だと思う」という回答は、男性26.2%、女性16.9%と、男性が女性を約9ポイント上回っている。一方、「知らない方だと思う」という回答は、男性48.4%、女性58.0%と、こちらは女性が男性を約10ポイント上回っている。このように、外来語・略語の知識についての自己認識には、ある程度の男女差が認められる。

さらに、性・年齢別に詳細に見ると、図16-1、図16-2のように、男女による様相の違いがはっきりする。男性の場合は、「知っている方だと思う」と「知らない方だと思う」が10代から40代までは拮抗してい

るが、50代で「知らない方だと思う」が大きく上回るようになり、さらに60歳以上でその差が一段と大きくなる。一方、女性の場合は、10代こそ「知っている方だと思う」の方が若干上回っているものの、20代で既に逆転して「知らない方だと思う」が上回るようになり、30代、40代でこの差が2倍以上に開き、さらに50代、60代とその差は拡大する一方となる。男女を問わず高年層では「知らない方だと思う」という自己認識が広がっているが、女性の場合は、これが中年層の30代、40代にも広がっている点が注目される。

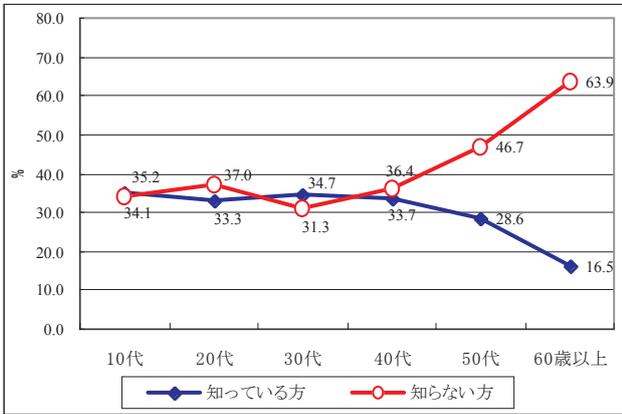


図16-1 外来語・略語の知識についての自己認識 (男性・年齢別)

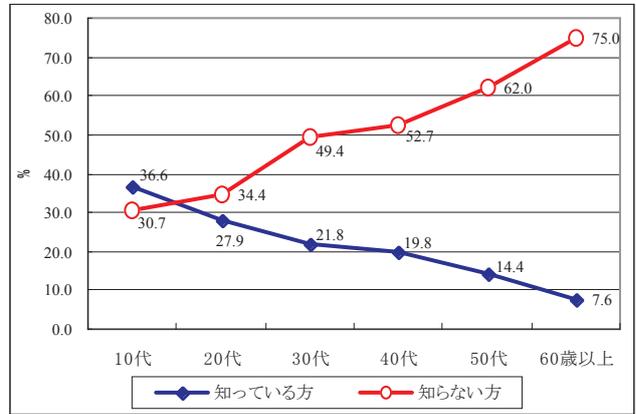


図16-2 外来語・略語の知識についての自己認識 (女性・年齢別)

4.2 外来語・略語の意味が分からず困った経験

次に、日常生活の中で、外来語や略語の意味が分からずに困った経験がどのくらいあるかについて、次のような質問文で調査を行った。結果は、図17のとおりである。

問：日頃、読んだり聞いたりしていることばの中で、外来語や略語の意味が分からなくて困ったことがありますか。この中から1つ選んでください。

しばしばある 時々ある あまりない めったにない わからない

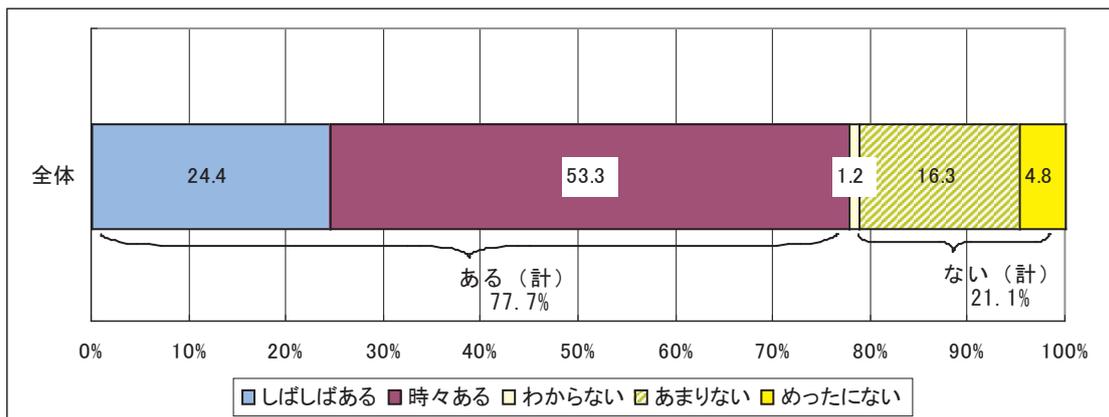


図17 外来語・略語の意味が分からず困った経験

「しばしばある」(24.4%)と「時々ある」(53.3%)を合わせた肯定的な回答「ある(計)」が8割近くに達する(77.7%)。一方、「あまりない」(16.3%)と「めったにない」(4.8%)を合わせた否定的な回答「ない(計)」は2割強である(21.1%)。5人中の4人に近い人が、日頃、読んだり聞いたりしている言葉の中で、外来語や略語の意味が分からなくて困った経験があるとしていることが分かる。

性別に見ると、「ある(計)」という回答で、男性74.8%、女性80.1%と、女性が男性を約5ポイント上回っている。女性の方が、困った経験を訴える人がやや多い点が注目される。

さらに、性・年齢別に詳細に見ると、図18-1、図18-2のようになる。男女とも高年層ほど「ある(計)」という回答が多くなっているが、ともにピークは50代である。しかし、無視できないのは、60歳以上で「しばしばある」という回答が、男性36.1%、女性37.8%と、男女とも4割近くまで突出している点であろう。高年層が、日常生活において「外来語弱者」の立場に置かれていることを示す結果となっている。

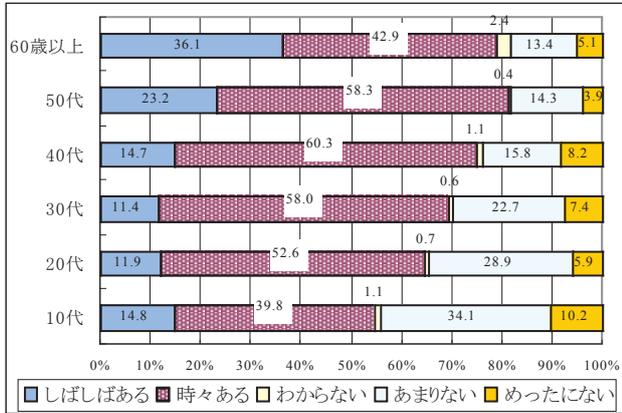


図18-1 外来語・略語の意味が分からず困った経験 (男性・年齢別)

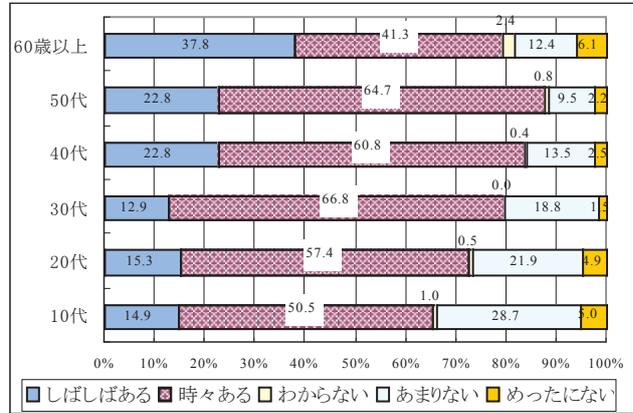


図18-2 外来語・略語の意味が分からず困った経験 (女性・年齢別)

さて、ここで本項の結果を、前項の「外来語・略語の知識についての自己認識」の結果と突き合わせてみると、図19に示すように、興味深い事実が浮かび上がってくる。

外来語や略語の知識の有無別に見ると、まず、「知らない方」と感じている人の3割以上が、意味が分からなくて困ったことが「しばしばある」と答えており(34.9%)、これに「時々ある」(54.4%)を合わせると、困った経験を持つ人は8割を超える(84.2%)。一方、自ら「知っている方」と回答した人でも、1割は困ったことが「しばしばある」と答えており(10.4%)、これに「時々ある」(54.4%)を合わせると、困った経験を持つ人は6割を大きく超える(64.8%)。外来語や略語について「知っている方」を自認する人でも、ほぼ3人中の2人は実は意味が分からなくて困った経験を持っているという、外来語問題の根深さを感じさせる結果となっている。

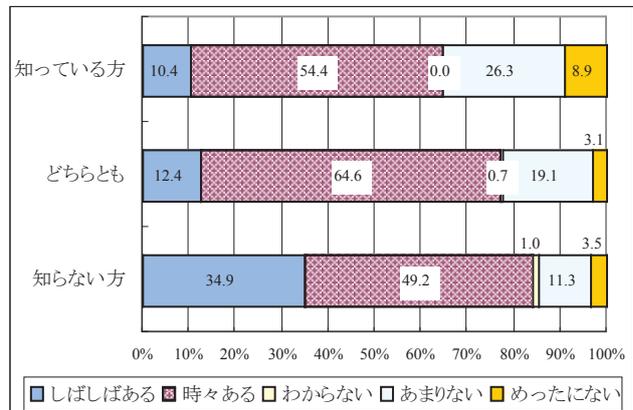


図19 外来語・略語の意味が分からず困った経験 (知識の有無別)

4.3 外来語・略語の使用についての自己認識

さらに、自分自身が外来語や略語を使う方だと意識しているか、それとも使わない方だと意識しているか、すなわち外来語・略語の使用についての自己認識について、次のような質問文で調査を行った。結果は、図20のとおりである。なお、ここでの「どちらとも言えない」も、自発的な回答として得られたものである。

問：あなたご自身は、外来語や略語を使う方だと思いますか、使わない方だと思いますか。

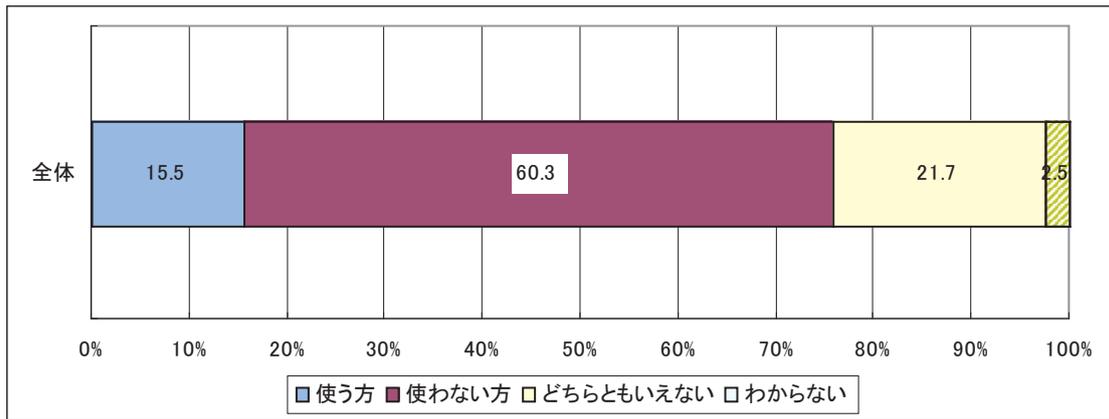


図20 外来語・略語の使用についての自己認識

「使う方だと思う」という回答は2割を大きく割り込んでおり(15.5%)、一方、「使わない方だと思う」という回答は6割を超える(60.3%)。外来語を使う方だと自認する人は、6人中の1人にも達しない少数派であることが分かる。

性別に見ると、「使う方だと思う」という回答は、男性17.7%、女性13.7%と、男性が女性よりやや多くなっている。

さらに、性・年齢別に詳細に見ると、図21-1、図21-2のようになる。外来語・略語の使用についての自己認識は、男女を問わず、年齢差の大きな項目であることが分かる。男女とも、10代では「使う方だと思う」が上回っているが、20代以上では逆転して「使わない方である」が上回り、年齢層が上がるにつれて差が大きく拡大していく。なお、「使わない方である」に着目すると、男性は40代から大きく増えるのに対して、女性は20代、30代から増え始めている点が注目される。

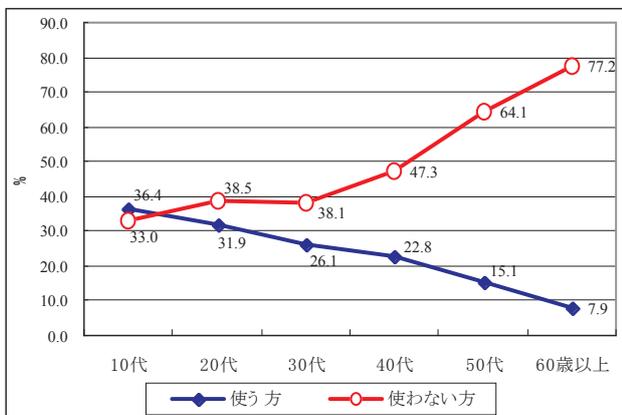


図21-1 外来語・略語の使用についての自己認識 (男性・年齢別)

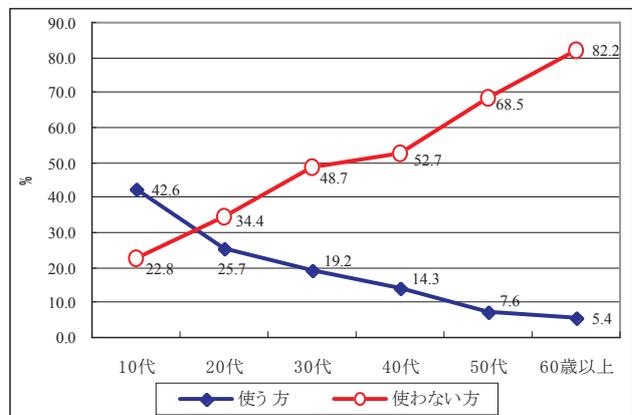


図21-2 外来語・略語の使用についての自己認識 (女性・年齢別)

4.4 外来語・略語の使い分けについての自己認識

最後に、自分自身が外来語や略語を、相手や場面によって使ったり、使わなかったりしているかどうか、すなわち外来語・略語の使い分けについての自己認識について、次のような質問文で調査を行った。結果は、図22のとおりである。なお、ここでの「どちらとも言えない」も、自発的な回答として得られたものである。

問：あなたは、外来語や略語を相手や場面によって使ったり、使わなかったりしていますか。

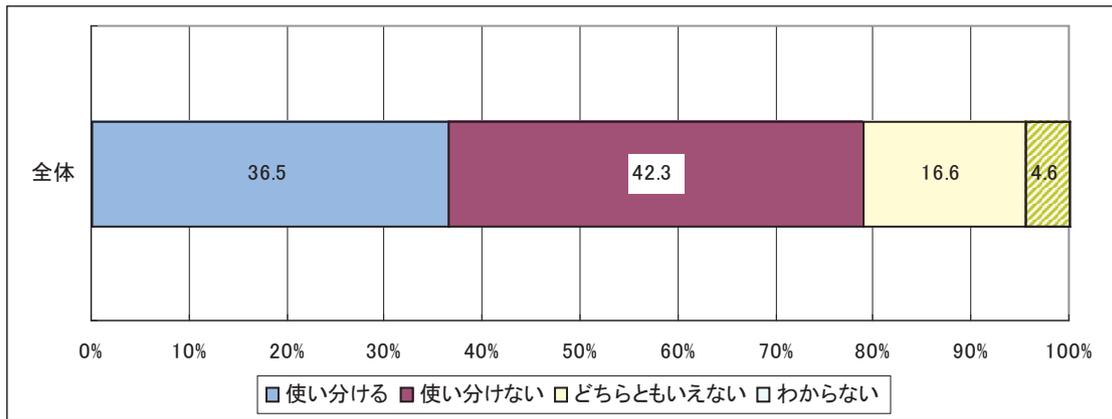


図22 外来語・略語の使い分けについての自己認識

「使い分ける」という回答は4割を割っており(36.5%)，一方，「使い分けない」という回答は4割を超えている(42.3%)。「使い分けない」という回答の方が，約6ポイント多い。外来語や略語を相手や場面によって使い分けると自認する人は，ほぼ3人中の1人と言ってよい。

性別に見ても，大きな男女差は認められない。

性・年齢別に詳細に見ると，図23-1，図23-2のようになる。相手や場面による使い分けについての自己認識は，男女を問わず，「使い分ける」と自認する人のピークが30代に来ており，その両側の世代がそれに続いて高く，両端の10代と60歳以上が低くなるという山の形になっている。ただし，4割の線を超える世代を見ると，男性が20代から50代までであるのに対して，女性は10代から40代までと，男女で1世代だけ山の位置にずれが見られる。外来語や略語の相手や場面による使い分けを，対人接触の機会や対人意識の高さの反映と見るならば，社会的活躍層に当たる年齢層にこのような傾向が強く見られることは首肯できることである。

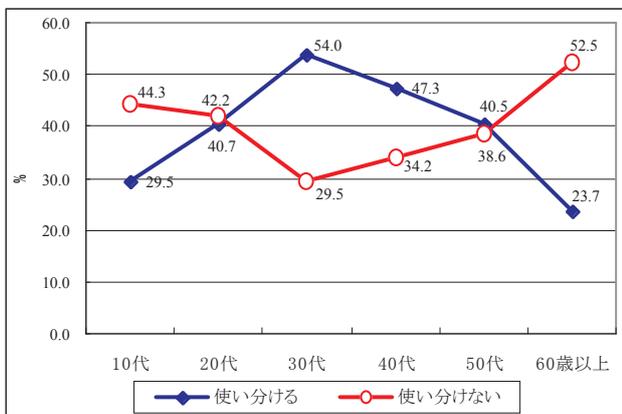


図23-1 外来語・略語の使い分けについての自己認識 (男性・年齢別)

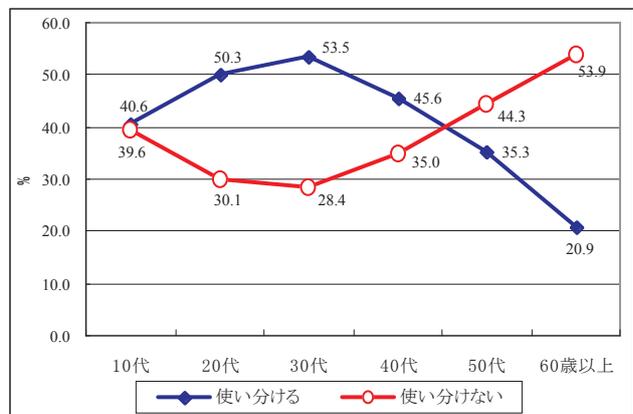


図23-2 外来語・略語の使い分けについての自己認識 (女性・年齢別)

5 おわりに

本章では，外来語の現状に対する国民一般の意識について分析した。取り上げた項目ごとに，まず全体の傾向に触れ，さらに性，年齢など社会的属性による違いや特徴に踏み込んで分析するという記述スタイルを取った。最後に，冒頭に掲げた三つの領域のそれぞれについて，得られた知見を簡単にまとめておく。

① 日常生活で接する外来語に対する意識

「外来語への接触頻度」については，およそ5人中の4人が高いと感じており，「外来語の氾濫」

の一端をうかがわせる。接触頻度が高いという意識が顕著に見られるのは、30代から50代にかけての社会的活躍層である。

「外来語の増加傾向」については、全体の過半数が好ましくないと見ている一方で、ほぼ3人中の1人は好ましいと見ている。年齢別に見ると、増加支持派が優勢である30代までの若年層と、増加反対派が優勢である40代以上の高年層とに、世代的に大きく二分されている。

② 外来語使用の功罪(良い点・悪い点)についての意識

「外来語使用の良い点」については、「話を通じやすく便利」という効率性、「従来なかった物事や考え方を表す」という表現上の的確性が支持されている。いずれも専門外来語の特徴に注目した評価であるが、その一方で商業外来語として効果的に使うことも一定の支持を集めている。年齢別に見ると、外来語でスムーズにやりとりができる若年層と、うまく使いこなせていない高年層との世代間の対比も浮かび上がる。「従来なかった物事や考え方を表す」という点は、社会的活躍層に当たる年齢層で関心と支持を集めている。

「外来語使用の悪い点」については、「相手によって話を通じなくなる」「誤解や意味の取り違えがおこる」といったコミュニケーション阻害にかかわる項目が最上位に来ており、優先的に解決すべき外来語問題の所在を強く示唆している。このような〈機能重視〉の立場に対して、高年層を中心に「日本語の伝統が破壊される」といった〈伝統重視〉の立場からの危惧や、外来語の習得上の困難を訴える声も聞こえてくる。なお、コミュニケーション不全に対する問題意識は、社会的活躍層に当たる年齢層に顕著であるが、これはこの層に特徴的な「発信者としての悩み」と言えるかもしれない。

③ 外来語・略語に対する自己認識

「外来語・略語の知識」については、外来語を「知っている方だ」と自認する人は、およそ5人中の1人に過ぎない。男女を問わず高年層では「知らない方だ」という自己認識が広がっているが、女性の場合は、これが中年層にも広がっている。

「外来語・略語の意味が分からず困った経験」については、ほぼ5人中の4人が、そのような経験があるとしている。女性の方が困った経験を訴える人がやや多い。年齢別に見ると、高年層が日常生活において「外来語弱者」の立場に置かれていることが分かる。また、外来語や略語について「知っている方」を自認する人でも、ほぼ3人中の2人は、実は意味が分からなくて困った経験を持っているという、外来語問題の根深さを感じさせる結果も出ている。

「外来語・略語の使用」については、外来語を「使う方だ」と自認する人は、6人中の1人にも達しない少数派である。男女を問わず、年齢差が大きく10代では「使う方だ」が上回っているが、20代以上では逆転して「使わない方だ」が上回り、年齢層が上がるにつれて差が大きく拡大していく。

「外来語・略語の使い分け」については、「相手や場面によって使い分ける」と自認する人は、ほぼ3人中の1人と言ってよい。社会的活躍層に当たる年齢層に多く見られるが、相手や場面による使い分けを対人接触機会の多さや対人意識の高さの反映と見るならば、首肯できることである。

参考文献

- 相澤正夫 (2003) 「日本語コミュニケーションにおける外来語使用の功罪」『日本語コミュニケーションの言語問題』
 国立国語研究所
 国立国語研究所 (2006) 『新「ことば」シリーズ19 外来語と現代社会』国立印刷局
 国立国語研究所「外来語」委員会 (2006) 『分かりやすく伝える外来語言い換え手引き』ぎょうせい